

2023年12月16日(土)夜『神聖で繋がり合う日』メール前文と始めの話

2023年12月16日(土)夜 『神聖で繋がり合う日』 メール前文

想いの動きを意識的に観察しながら過ごしておりますと、「ああ、私は今、肉体(からだ)こそが自分なんだ、人なんだ、人類なんだと決め付けてしまう習慣の想いに入り込んで、神靈としての本心本体を無自覚的に忘れてたんだな」と自覚することが時折あります。

そのようなときに私達は、他者に対する善意や善導が一方的な押し付けになってしまっている状態に気が付けないでいることがあります。そのような精神状態のときは、せっかく大調和を志向し善意で人と関わりながら、その実、自と他を引き離した高みに己を置き、善の押しつけをしています。

それは、二元対立の意識境涯であり神聖を忘れた想念習慣でありますから、“心のアンテナ”を研ぎ澄まして、自らの心の立ち位置が今全体の中のどの地点にあるのか、意識座標をしっかりと把握しておくことが肝要です。

宇宙の真理を身に修め、生命の根源へと回帰してゆく道程は人の数だけあります。そのようなことを想うとき、私はいつも富士山の頂上を目指す登山の有り様を思い出します。

富士山は単体でそびえる円錐形の山ですから、登山道のある道を行っても道なき道を歩んでも、東西南北どこから登っても、誰もが頂上へ辿り着くことが出来ます。

真理の頂きを目指し生命の大元へと帰りゆくひとりひとりの生き様は、この富士登山に例えることができます。例えば、東側から登っている人と西側から登っている人がいるとしますと、その人たちがそれぞれに見ている道中の景色はまったく違う景色であります。

私達が肉体にありながら他者と関わり生きているその様は、異なる意識座標を歩みながら違う景色を見つつ、無線で励まし励まされの会話をしている登山者同士に例えることができます。

その場合、意識の深奥たる上空から俯瞰する意識視座を持ち合わせていなければ、話している相手が今何処に居て、どんな景色を見ながらどのような状況にあるのかまったくわかっていないため、自分がそこに至るまでに歩んできた状況の経験則だけを頼りに、相手にアドバイスするようなことをしがちです。

しかし実際には、登っている山道の状況も異なれば見ている景色も違うため、そのような状況で行なうアドバイスは当てずっぽうになりがちで、的を射た内容であるとは限りません。

そこで大切になってくることは、私達が耳にタコができるほど聞いてきた「相手に寄り添う」という心の立ち位置です。今回のたとえ話でいいますと、そのような状況下で相手に寄り添った言葉をかけて差し上げるためには、富士山周辺を上空から俯瞰する神聖の視座を心に持ち見つめることです。

例えるならそれは、円盤に乗りながら地上の状況を観察するような意識視野です。神聖科学の粋(すい)を集めた円盤という乗り物は、上空の機内に居ながらにして全体を俯瞰的に見ることもできれば、特定の地点にフォーカスしてその地点の状況をつぶさに観察することもできます。

私達が肉体にありながら互いを神聖の存在と認めながら、状況に応じて“相依り相教え相挙げ”ためには、大調和という宇宙の真理・法則に則りながら、肉体意識と共に神聖の視野を持つことです。

それは先週もお伝えしました『観る側の意識』と『観られる側の意識』を同時に持ち合わせることともいえますし、守護霊意識との一体化を果たした状態ともいえます。

この地球には三百万種から一億千百万種ともいわれる生物が生きていますが、前述のように観る側と

観られる側の意識を併せ持ち、生かされる側でありながら生かす側でもある生物は人類だけであります。

これからの時代の人類は、そのように個体としては生かされる立場でありながら、生命意識の側に立てばすべての内に自らを自覚する宇宙心を併せ持つ存在に変容してゆきます。

そのプロセスにありながら私達が為すべきことは、ただただありとしあらゆるものうちにある神聖を認め、愛(め)で、感謝の光で包み込むことです。

そのようにしながら神聖復活の印を組みつづけてまいりますと、地球天地を創造しているのが他の何ものでもない私達の認識力であることに確信を持って、いかなる予言にも左右されずに、明るい未来に邁進してゆくことができます。

土曜日の夜はそのように、真に他者に寄り添える俯瞰の視座に立ちながら、内外の世界に神聖の光を振り撒いてまいります。

※「相依り相教え相挙す」とは、現代に生きる私達の心構えで、『小説阿難』の一節に出てくる阿難尊者の言葉です。参考までにその部分を記載します。

“雨舎(うしゃ)よ、我等は人によらず、ただ法(のり)によって結ばれている。

我等は共に村邑(むら)を遊行し、集う時には法を知れる比丘(びく)を請(しょう)じて教を乞い、そのいうところ清浄なれば、共に喜び、その教を行に現わし、彼の比丘もし誤りあれば、我等は法に隨(したがつ)て教(おし)う。

かようにして多くの比丘は教を一つにし、行いを一つにして水乳の和合するが如く和合しているのである。

雨舎よ、私がさきに世尊と等しき比丘なく、依るべき比丘なしというたが、この意味において諸々の比丘は、互いに相依り相教え相挙しているのである。

人に依らしめれば自ずからそこに情が生じて、教に誤りありても、その誤ちに心づかぬようになる。

ひたすら法によりてこそ、威儀を守り、広く学び、友誼(ゆうぎ)を尽し、善を修め、智慧を研することが出来るのである。“

五井昌久著『小説 阿難』より

2023年12月16日(土)夜 『神聖で繋がり合う日』 始めのお話

皆様、こんばんは。夜のズーム祈りの会を始めます。今日は、“人に寄り添える心境”と“俯瞰の視座”が切っても切れない関係にあることを確認しながら、世界全体に寄り添って、すべてを包み込むような愛の光を放ってまいります。

「他人(ひと)に寄り添って生きよう」— これは思うことは簡単ですが、実際に行動に移してみると、把われの想いに邪魔されて上手く出来なかったり、寄り添っているつもりで“善意の一方的な押し付け”になっていたりすることがあります。

皆様もご存じの通り、人に真理をお伝えする場合でも、様々な境涯におられる不特定多数の方の前でお話しするときと、特定の個人とマンツーマンでお話しするときでは、お伝えする内容が自ずと異なってまいります。「人を見て法(のり・真理、)を説け」という言葉の通りです。

そのようなことがあるので、真理を求める人達の集まりでも互いの立ち位置の違いが分からずに、善意のつもりで他人(ひと)に迷いを生じさせる強制をしていたり、真理の「し」の字にも興味がない方に相手の心の柔らかいところをえぐるような言葉を使ってしまって、その方の心を知らない間に傷付けていたりする場合があります。

メールにも書きましたように、神聖復活を目指す私達の関係性は、東西南北それぞれの方角からみんなが富士登山をしながら、無線で繋がった相手と交流しているような状態です。ですから、例えば『人を赦すことが難しい』という命題に対しても、人の数だけの通り道・最適解・解決策があるにもかかわらず、自らの経験則を唯一の解決策であるかのように押し付けてしまう場合があります。

そうした難しさは、俯瞰の視座を持つことで解消されます。メールでは俯瞰の視座をもつことによる寄り添いの状態について、「それは『円盤に乗りながら地上を観察するような状態』であり、空飛ぶ円盤に乗った状態で富士山一帯を周回すれば、上空の機内に居ながらにして全体を俯瞰的に見ることもできれば、特定の地点にフォーカスしてその地点の状況をつぶさに観察することもできる」と書きました。

そのような俯瞰の視座は、自分自身を「肉体こそが私だ。私は私の力で生きている」と決め付けた心には顕われてこないため、「私は本来いのちの光そのものであり、守護霊と一つになって二人三脚で生きている存在なんだ」という神聖観を確かなものにすることがはじめの一歩になります。

そのためには、とっさの閃きや第一直観を大事にして、それを守護霊の心として自覚して過ごすことです。そうしてまいりますと私達はいつの間にか、“生かされて生きている自分”と“自らを育て生かしている意識”的両方を、同時に持ち合わせている意識状態に変貌してまいります。

その場合の“生かしている意識”、即ち本心・本体の側の意識こそが、私達が目指す“俯瞰視できる神聖の視座”であり、富士登山の例えでいえば、頂上・十合目の意識境涯であります。

本日も私達がそのように、個体を持った存在であると同時に、全体をも己自身と観ることができる神聖の視座を持ち合わせている存在であることを意識しながら、地球界に“生かされて生きていることへの喜びと感謝”的種を蒔いてまいります。またそのとき、私達の本心・本体は、この世のすべての存在に祝福の光を振り撒いています。そのことに自信と確信を持って、地球にかかるすべての状況と脳裡をよぎる想いを一望しながら、『すべてを生かし育むいのちの大元からの光』を放ってまいりたいと思いますので、よろしくお願ひいたします。

それでは時間になりましたので、世界平和の祈りを日本語と英語で行ないます。三分半のCDを使って行ないますので、眼を閉じて神聖の視座に焦点を合わせてお祈りください。私が「はい、ありがとうございました」と申し上げましたら目を開けてください。